



『トクシマ・アンツアイガー』

第3号

徳島 1915年4月18日



戦時中のドイツの食料（１）

「戦争は勇敢さについてだけでなく、国家体制の堅固さと経済的資源の豊かさについての大きな力比べである」（パーリョウ『日本帝国』）。

今回は国家体制や技術的な資源を取り上げるのではなく、これらの分野を最近の数値から検討してみたい。

この論文の目的は、過熱している戦時中のドイツの食料問題に光を当てることである。

われわれの敵は、ドイツを軍事的に打ち負かすことができないだけでなく、ドイツが両方の戦線において敵国に攻め入った所で戦争に耐えられることを、わかったに違いない。彼らは耐えられることを認めざるを得なくなって後、ドイツの食料補給を止めて兵糧攻めにすれば、講和に追い込むことができている。

ドイツの経済生活を表面的にしか見ていない人には、敵のこうしたもくろみは成功しそうに見えよう。なにしろドイツ帝国の人口数は、先の1870 - 71 年の大戦以降4千万からほぼ7千万に増えているのだから。

もちろん大戦後の最初の何年かは、ドイツは穀物の輸出国の一つだった。けれども政治的統一に続いてすばやく工業分野での隆盛が進み、それに伴ってドイツは世界の産業国の中で第1位になった。現在われわれは、人間ではなく商品を輸出し始めている。これまでとても豊かな国々、ことにアメリカ合衆国がわれわれの過剰な人間を受け入れてきたが、まもなく労働力不足が生じた。移民は一気に減少し、今ではドイツへの移民数はドイツからの移民を越えている。

けれども大きな人口の増大は第一に自然増、つまり誕生が死亡数を越えていることによる。収益の可能性が増え、社会施設が改善され、統一したドイツが息子たちに与えた政治的自由は大きくなり、自然な国民の増加を自国で有効に活用することができるようになった。

人口がとても増えたので穀物を輸出する国から輸入する国に変わった

が、いまだにライ麦や砂糖は大量に輸出しており、誇りと大きな満足を持って断言できるが、交通と産業がドイツの研究と学問を利用できたばかりでなく、農業も祖国のあらゆる分野での前進と歩調を合わせ、はばかりとろなく古い道を取り除き、われわれの学問が指し示す新しい道を切り開いている。

われわれの人口はここ 20 年で年ごとにほぼ 100 万¹ 増えたのに、もちろん年毎の収穫のさまざまな結果による変動はあるにしても、この時期にパン用の穀物の輸入はほぼ同じ水準に止まってきた。

1894 年以降のパン用穀物の輸入は平均 150 万トンだが、ここ 25 年間の国内での穀物の収穫は 1,800 万トン、じゃがいもは 2 千万トンもの増加を見ている。

これがおそらく、今はもはや正しく価値付け正しく評価することが難しくなくような実績なのである。なぜならさもないければ、戦時中の愛する祖国のたいていの家のドアの前にとくに飢餓が訪れ、農業分野での力強い進歩など生ぜず、われわれを兵糧責めにするという敵の希望はおそらくとくに達成されていたろうからである。したがって多かれ少なかれわれわれドイツの農民は、間違いなく長い平和な作業の中で手にしたこの輝かしい勝利を心から歓迎してよかろう。

つづく

日本の歴史（2）

伝説によると日本の島々は神によって創られた。その子孫は天から降り 2 つの国を築いた。主島の本州にある国と九州にある国である。九州にあった国の支配者である神武天皇はさまざまな遠征の末、本州の大部分を支配した。神武は紀元前 660 年 2 月 11 日に即位し、日本の紀元が始まった。

伝承とは異なり今日の歴史研究は、カフカス人にとっても似ている種族で

1 原文では 1000 万だが第 4 号で 100 万に訂正されている。

あり、今でもわずかだが残っているアイヌが日本の原住民ではと想定している。彼らがほとんどすべての島に広がっていたことは、石器時代の無数の遺跡から推測できるようである。原住民は、大陸からの二手の侵入者に追い立てられた。モンゴル・マレーシア系が九州に住み着き、満州・韓国系は韓国に向かい合う本州の北西に侵入した。2つの種族は後に統合したが、おそらく九州に入ってきた種族が、権力を握った。アイヌは侵入者を押し戻そうと必死で努力したのだろうが、しだいに北に追いやられた。

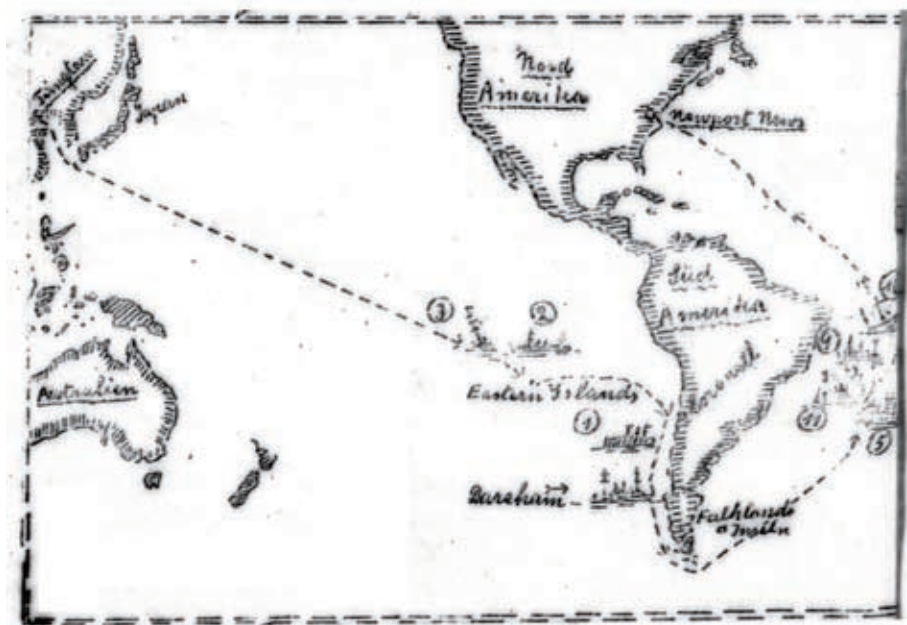
九州・四国と本州西部に、統一国家が作られた。この国は共通する一人の人間によって支配されていた。もちろんその権力はほんの限られたもので、まだ領土全体をまとめるような名前もなかった。この国は存続したが、絶えず支配的家族の反目や種族どうしの反乱、東と北におけるアイヌとの戦いに脅かされた。

国内が安定した時期には、日本はしばしば東韓国に侵入し、韓国を日本の支配下に置こうとした。こうした戦いは、ほぼ紀元 200 年から 400 年までは起こらなかった。韓国の征服は日本の発展にとって大きな意味を持っていた。韓国ではすでに、日本文化の大きな基盤となっていた高度に発展した中国文化が広まっていた。こうして中国の建築様式、米作の仕方、米からの酒作りや養蚕が韓国から引き継がれた。中国の陶工・磁器職人・織物職人・仕立職人が、生業を伝えるために日本にやってきた。もっとも重要なのは王位継承者の教師として招かれた王^わ仁で、彼の活動が漢字や中国文化世界一般の知識が広まる出発点となり、何世紀にもわたってあらゆる分野で日本民族の発展にとって重要な手本となった。日本の記録では王仁は西暦 285 年に日本にやって来たことになっているが、より信用できる韓国の推測では、405 年ということになっている。

つづく

「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」

北ドイツ・ロイド海運会社の定期船「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」は日本からの帰路上海に着いたが、戦争が始まると戻るように命じられ運よく青島に到達することができた。ここで急ぎ砲艦「ルクス」と「ティーゲル」の大砲を取り付け、この船はこれらの砲艦の乗組員と元からの火夫要員を乗せて「エムデン」とともに8月6日に出航した。司令官は、ティーリヘンス少佐である。それからアイテル・フリードリヒは巡洋艦隊とともにフォークランド諸島近くの戦闘にまで参加し、巡洋艦への補給船として働いた。フォークランド諸島から離れるとこの船は巡洋艦として戦闘をはじめ、12月から3月まで南米から北米を航行した。その手に掛かった餌物は膨大だった。ほぼ1年間そのボイラーとエンジンは休むことがなかったので、アメリカ政府の許可を得て、ニューポート・ニュース港で長期の修繕をしなければならなかった。アメリカの報道によると、「アイテル・フリードリヒ」は港の前で待ち伏せするイギリスとフランスの軍艦から逃れ



なければならなかった。確かに勇敢な司令官にはこのようなちょっとした離れ業を演ずる力があると思うが、残念ながらこの知らせは信じがたいように思える。新たな報道によると、この船は無理やり武装を解除されたそうである。

これまで明らかになった「アイテル・フリードリヒ」の航行の戦果は、次のとおりである。

1. チャーカス	汽船	?	イギリス
2. ジャン	汽船	3,000 トン	フランス
3. キルダルトン	汽船	?	イギリス
4. ピエール・ロキ	帆船	2,196 2 トン	フランス
5. イザベル・ブラウン	帆船	?	ロシア
6. ヤコブセン		2,195 トン	フランス
7. インヴァーコ		1,421 トン	イギリス
8. メリー・アヴァ・ショート	汽船	3,605 トン	イギリス
9. フロリド	汽船	6,629 トン	フランス
10. ウイラビイ	汽船	3,630 トン	イギリス
11. ウイリアム・フライ	帆船	3,374 トン	アメリカ

「ウイリアム・フライ」は、リヴァプール向け的小麦を積んでいた。「アイテル・フリードリヒ」の 150 人の水兵が、小麦の一部を船から投棄した。けれどもあまりに時間がかかりすぎたので、終える前に船を沈没させたのである。ともかくこれも、いまでもアメリカがこの船を自国に抑留している理由である。

われわれが日本の新聞から抜き出したスケッチには、3 隻をのぞきリストに載っているすべての船のかたわらに、それらが沈められた場所が書き込まれている。場所に関してはスケッチに「デアヘン」という名のもう一隻のイギリスの汽船が含まれているが、この船については他に何の報告も

ない。拿捕した船の総トン数は、ほぼ3万5千トンに達している。したがってわれわれは「プリンツ・アイテル・フリードリヒ」も、みずからの責務を果たしたドイツ海軍の代表とみなしている。

戦闘日誌（2）

- 8月16日 戦場ミサ。
- 8月18日 日本の最後通牒についての最初のきちんとした報告。国民兵を召集。自発的な消防隊の設置。
- 8月19日 歩兵保壘強化。人員配置は次の通りである：第1保壘 第3海兵大隊第1中隊、第2保壘・第3保壘 同第7中隊、第4保壘 同第2中隊、第5保壘 同第3中隊。
- 8月21日 汽船「パクラト」は、船内に260人の婦人と子どもを乗せて離港。
- 8月22日 S90とイギリスの駆逐艦「ケンネット」の間で戦闘。「ケンネット」は、大港の付近にいた。「ケンネット」の死者3名・負傷者7名。皇帝陛下から最初の電報が到着。
- 8月23日 日本の最後通牒期限切れ。「ラウティング」が機雷に触れた。被害は軽微。
- 8月24日 「カイゼリン・エリーザベト」武装解除。乗組員は天津に行ったが、後に隊列に戻った。
- 8月27日 朝8時半に、日本の封鎖艦隊が現れた。加藤提督の無線連絡によると、青島は封鎖される。会前岬砲台は機雷探索の水雷艇を砲撃。
- 8月28日 会前岬から、（対岸の霊山半島の）封山岬を砲撃。
- 8月29日 日本の封鎖強化。

- 8月30日 最終列車が出発。工兵中隊は、膠洲までの比較的大きな鉄橋をすべて爆破。
- 8月31日 激しい嵐と雨が襲来。日本の駆逐艦「白妙」、連島付近で座礁。この船は会前岬から砲撃され、後には「ヤーグアル」にも砲撃されて完全に沈没した。
-

われわれの公演の夕べ

「たくさんのものをもってくる人は、何人もの人に何かをもたらししてくれる。誰もが満足して家を出てゆく」。

このゲーテの言葉はおそらく、今回の講演の夕べにぴったりだろう。というのもそれはわれわれに、音楽・合唱・講演・明るくまじめな詩と散文を提供してくれ、すべてが居合わせた人々を喜ばせたに違いないようなよいものだったからだ。

わけでも、今回の夕べの男声合唱はよかった。ことに「自然における神の栄光」と「野ばら」はすばらしく、喜んでくり返すがこれらは珠玉のドイツ民謡である。

最初にあげた歌において、弦楽オーケストラと合唱団にいっしょに演奏させるという考えは、当を得たものだった。これこそがまさに共演と言うしかない。なぜなら何を語っても、この絶賛を損なうことにしかならないからである。

詩などは、本当に上手に語られた。「フランス人たち」では時折言葉で何かより多くことが表現され、ことに音楽の挿入が講演に役立っていた。

もう一つ特に取り上げたいのは、「どのようにしてプロイセン人は、紀元66年にボヘミアに入り込んだのか」という製塩業者の逸話についての公演である。語り手は、ボヘミアの方言を、少なくともわれわれの耳にはとて

も上手に発音できたが、それだけでなく彼は何よりも詩人がこの話にこめた愉快的ユーモアを完全に表現し、効果をあげることができた。一番よかったのは大きな拍手が、このことを語り手自身に伝えてくれたことである。

ルフ氏は「われわれの敵」で、詩人であるとともに偉大な画家であることを示してくれた。もちろん彼がこんなに長い間自分の才能を隠していたことを残念に思うしかないが、これからは時折話を聞く機会があることだろう。

青島での戦争体験

この欄では青島要塞のエピソードを掲載したいので、ご自身の論考をお送りください。

退却の前夜

われわれの砲台では、一日中活気が溢れていた。朝早くから暗くなるまで絶えず火を焚いていた。その間沙子口分遣隊はT中尉の指揮の下、歩兵保塁の援護のために到着した。第3海兵大隊の仲間は長い緊張した行軍をしてきたのだ。彼らは最後の瞬間になってついに沙子口の兵舎を爆破し、一晩中歩き続けたのだ。疲れてへとへとになって彼らはわれわれの所に着き、やっと休息を取れることになり砲台の後ろの酒保でゆっくりくつろいだ。けれどもそう長く休息できるはずもなかった。われわれの12cm砲の深い砲声は何度も眠りを妨げた。

そしてついに午後遅くには日本人が、何としてもまだいくらか元気なところを示そうとしたのだろう、彼らの火砲から何発かの榴散弾を打ってきた。弾は耳のそばでかすれた大げさな唸りをあげて破裂したが被害はな

かった。

もうすっかり暗くなった。われわれの左翼に位置していた、予備役の野戦砲兵中隊と東アジア分遣隊第1中隊も戻ってきた。砲台の中はしだいに静かになった。はるか後ろの方に青島のかすかな明かりがきらめいていた。われわれの前にまだ李村の村役場と上水道の残骸が浮かんでいた。われわれの前のそこも静まり返っていた。労山の麓にまで延びているその広い溪谷で何が起こったのか、誰に判ろう。労山の険しい岩角は夜空にくっきりと浮き上がっていた。

敵はもうどのあたりまで来たのだろうか？眠るなどということは考えられなかった。われわれと日本軍の間に、わが軍の誰一人としていないということは判っていたからである。左右に歩哨を置き、皆が緊張して闇の中に目を見張り、耳をすましていた。後ろで、第3海兵大隊の仲間たちがようやく当然の権利である眠りについていた。

けれどもこのたびも、彼らの安息は長くは続かなかった。

突然右側に明るい閃光が。歩哨は星型の光を放ち、それに続いてすぐに何発かの小銃の鋭い弾ける音が深い静けさを切り裂いた。

すぐに沙子口隊が起き上がり、走ってわれわれの右の塹壕に飛び込んだ。砲台じゅうに「曳光弾を射て」という命令が響いた。そしてまもなく曳光弾が夜空に打ち上げられ、われわれの地域の上にまばゆい閃光が広がり木々や茂みが照らし出された。

そしてみんなの目がまだ明るさに馴染まないうちに、塹壕の中ではぱちぱちと銃火が発せられた。みんなはそこのはっきりしない姿に気づいた。そう敵はもうすぐそばに来ていたのだ！すぐにまた「止め」という命令が下されたが、もう聞き取れなかった。今また右にいくつかの星型の光。そしてまたぱちぱちという銃火。

わが砲台は残念ながら敵がもう死角に入っていたので、応戦できなかった。そこで指揮官は大砲を右の道路に運ばせた。少なくとも、予想もしなかった夜襲にいくらかでも対応するためである。

銃火はまた静まり分隊がわれわれの所にやってきた。大砲を移動するという面倒な仕事を手伝うためである。というのも、われわれ25人だけではこのような仕事はできなかったからである。

まもなく2つのカノン砲が誘導車につながれ、引き綱が付けられひどく不格好な大砲がゆっくりゆっくりと、砲台から道路に運ぶ険しい道に揺れながら下りてきた。攻撃準備が完了した榴弾には炸薬が込められていた。というのもわれわれは大砲用の引き馬をもっていなかったので、攻撃の際に引き返すことは不可能だった。できるかぎり大砲を撃ち、それから最後の瞬間に爆破されるように定められていたのである。

そしてまた、前方の物音に緊張して耳をすます。敵は近づいているのではないか。攻撃を企てているのではないか？けれどもまったく静かなままだった。あちこちでわずかな銃撃が行われており、今われわれのずっと左に星型の光が見えた。

激しい銃撃から敵は、ここにはかなりの兵力がいると思い込んだらしい。けれども、われわれの右にいるのはほんの50人足らずだった。

さらにすべてが静まり返っていたので、結局はみんなまた酒保に戻った。前方には一人の歩哨だけが残った。そしてわれわれも歩哨をおいて、路上の大砲の間に横になりちょっとでも仮眠を取ろうと努めた。

けれどもそうこうするうちに3時になり、2時間も休むことができなかった。薄闇から人や馬の姿が浮かんできたときには、もう東の空が明るみ始めていた。ふたたびわれわれの左の塹壕を占拠したのは、東アジア分遣隊の第1中隊だった。大砲がほとんど道路全体をふさいでいたので、われわれは機関銃を積んだ馬を通り抜けさせることができなかった。

自分たちのためにも大砲をまたセットしなければならない時間になっていたが、こうしたことも闇に助けてもらってしなくてはならなかった。

われわれの砲台がふたたび射撃できそうな明るさになったときには、もう早朝の薄明りの中で村や畑とともに溪谷が見えてきており、昇ってくる太陽が労山の頂きを紅く染めていた。

夜は終わった。われわれのうちの何人かにとっては、それは最後の夜ということになった。

愛の贈り物

先週の木曜日に、ノルトハウゼン市からここに8個の愛の贈り物の小包（布製品・ハンカチ・ストッキングなど）が届き、近いうちに分配される。これもまた、故国でもわれわれのために広まっている愛と献身の印である。

女生徒たちが作ってくれたストッキングの一部には、小さな愛の贈り物と詩が添えられている。たとえば、このような詩。

私が愛する故国で編んだものは、敵地でもあなたを温めてくれることでしょう。

だってたくさんたくさん編むことで、たくさんの願いを一緒に編み込んだのですから。あなた方のもとにおられます神様が、敵の策謀からあなたを守ってくださり、お元気で過ごされ、まもなくまた私たちの所に帰してくださいように。

女生徒やほかの寄贈者の住所が添えられているので、贈り物をもらった人の誰もが怠ることなく、親切な寄贈者に自筆でお礼を書いてほしい。そのうえわれわれのうちにもたくさんいる詩人の一人が、ノルトハウゼン市に同じく熱のこもった感謝の詩を贈ってくればすばらしいのだが。

ケルナーの夕べ

この次の娯楽の夕べには「ケルナーの夕べ」が企画されており、この詩人の一幕物である『ヨーゼフ・ハイデリヒ』か『ドイツの誠意』が上演される予定です。このドラマには、将校2人・伍長1人・文民3人の6人の俳優が出演します。

公演に参加したい人は、詳細を『トクシマ・アンツアイガー』の編集室にお尋ねください。－ 演劇の才のある人はどうぞ！

スポーツ

ファウストバル

この競技のルールはよく知られていないようなので、以下に説明し直しておこう。

コートは20 m×40 mで、中央の高さ2 mのロープで区切られ、両チームは5人ずつである。最高得点で勝敗が決まる。サーヴの際にはプレイヤーはラインから2 m離れ、地面に両足で立たなければならない。

ボールがロープの下を通ったり、ロープに触れたりコートの中の地面に落ちたり、第3打がロープを越えて相手のコートに入らなかったり、あるプレイヤーの下腕か握ったこぶし以外に触れたときはアウトとなる。ボールは正規のコート内で3回までパスできるが、同じプレイヤーは一度しか打てず、アタックとアタックの間に一度地面で弾ませてよい。ボールを逸らしたチームは、もう一度サーヴをしなければならない。アタックは下腕か握ったこぶしで打たなければならない、押し込むことは許されるがロープ上でボールを押し込んではいならない。ボールがきちんと打ち返されるとに1点が入る。サーヴしたボールがロープの下を通ったり、ロープに触れたり敵のコートの外に落ちるとサーヴ側が1点を失う。この競技でも薦

めたいのは、いつも一緒にプレイするチームを作ることである。なぜならこの競技もまさにサッカーと同じく、チームワークが重要だからだ。

『トクシマ・アンツアイガー』のチェス・トーナメント

デュムラー大尉の親切な起案によるチェス・トーナメントが、今週始まることになりました。参加を希望される方は、文書で希望を編集室に伝えてください。競技は2段階で行われます。より強い競技者クラスによる本選への参加者を決める予選と、それぞれの本選です。

予選トーナメントはたくさんのグループに分けて行われます。各グループの勝者はファーストクラスの本選に進むが、その他の人はセカンドクラスの本選に回されます。

本選に関しては、ファーストクラスとセカンドクラスの勝者それぞれに賞が与えられます。

予選でもファーストクラスの本選でも、それぞれがグループの中で試合をします。勝ちゲームは2点、引き分けゲームは1点、負けゲームは0点です。セカンドクラスの参加者は本選での点数が認められると、ファーストクラスと同様に競技を続けられますが、それ以外はどの敗者もただちに失格となります。

申込みは4月20日の火曜日までです。21日水曜日の夜6時半にくじ引きで競技者のグループ分けが行われます。

競技は、同日の7時に始まります。

詳しい競技ルールは、参加者への通知に書いてあります。

競技委員会

前回の課題の解答

第3問

1. Tg7 x h7 黒さまざまに対応
次いで白 S - g7 か T x h6 か S - c5 あるいは
D - c6 か T x e7 で詰み

第4問

1. Ld1 - a4. 黒さまざまに対応
これに対し白 Sd7 - b6 か Tc4 - d4 で詰み

正解者は課題3, 4とも、ペーマー予備役一等機関兵曹、バウムガルテン二等砲兵、ヨーゼフ・ヴェーバー二等砲兵、ドーベ予備役一等砲兵である。

投 書

本紙の第2号の投書に反対して書かれた、「第2のユリウス」という「投書」が届きました。けれども残念ですがその形では、この人の記述を公にすることができません。

読者にふさわしい「投書」欄とは、それが何らかの刺激を与えてくれ、みんなが興味を持つようなことを表現する場になっている限りでのものです。ですからわれわれは、個人攻撃の代弁をするわけにはいかないのです。

編集長

新しい舞台

これまでの「公演の夕べ」の際にも、舞台が今あるごく限られた手段を使ってとても上手に作られてきたことは認めるが（何よりもハナスキー予

備役二等砲兵のお陰である)、もっと高い要求にも応じられるような舞台がほしいという希望にも注目したい。こうした目標を達成するため、募金をしようという機運が高まっている。このような気運を生かして、できればよい成果を上げようと寄付者名簿を置いてきたが、ことによると衣装なども作れそうである。だからこれからの「公演の夕べ」は前途洋々である。

Dr. ヒンデンプルク

閣下、4学部すべてから

お祝い申し上げます。

4学部とも、その博士号があなたの戦勝行為に対し
付与されることを喜んでおります。

法律家としてあなたは栄えある戦いにおいて

すばやくロシア人と決着を付けました

哲学者としてあなたは彼らに

定言命法という概念を与えました

そしてあなたが巧みな作戦を立てたことを

彼らはきちんと感じていました

あなたは勝利を確信した輝く剣によって

ロシア人に祈ることを教えました

こうして4つの学位が授与されたのです

あなたの十分な価値を持つ勝利の報いとして

Dr. シュテファン・フォン・リヒト



巡洋艦「エムデン」からの蚊²

2 「エムデン」上陸隊の隊長はミュッケであるが、これは「蚊」という意味でもある。



満員だよ！

「フリッツ、一緒に行こう！ファウストバルをするぞ！」



「いやだよ。今は暇がないんだ。英語の授業の勉強をしているんでね」

戦争を自分の目で確かめたかったロシア皇帝は、その目的で前線にやってきた。皇帝に正しい理解を与えるために、将軍たちには前もって自分の部隊とともに皇帝の前を通して逃げていくよう指示を受けていた。

パン焼き歌手

連れて行くべきなのだ。

勝利、それは歌える人にとっては
まったくすばらしい言葉である。
この世で歌うという技術は
一つの宝であり高価な財宝である。
このひどい時代を探してみても
歌はすばらしい行為である。
だから君は私を歌手がくつろいでい
る所へ

食事をしようと思ったら、
キッチンに来るのは晩だけにしてい
しい。
日中はそこでは、力を尽くしての
歌合戦が行われているのだ。
そこには2列に並んだ、
優れた合唱団がいる。
そしてざわっとするような暗い歌で、



聞く者の耳を震わせる。

もらうのだ？

ぞっとして君は尋ねることだろう。

君たちは食べるためにだけ

「ここではみんな、腹を空かしている

ここにいるのか？

のか？」と。

次回は死ぬほど食べたらいい！」

というのも彼らがそこで歌い問うて

同じくらい腹の空いている

いたのは、

ほかの人たちは一日をどうして

パンへの鬱屈した叫びだった

与えられた3つのパンで十分やって

からである。

いけるのだろうか？

そして彼 H... は、毎日驚嘆交じりに
この歌手集団を見やっている。

この貴重な時に、ドイツで人々が

しているように

というのも、この国ではパンは

スポーツまでしてである。

とても高く貴重だったからである。

それに対して、われわれの H... は

「君たちは何のために昼飯を

反論できる。

もらうのだ？

彼は、もう一度とても上手に調理

何のために暖かい夕食を

するのである。

